

教員になった私は、若い頃に、国語の勉強会があるといいなと考えていた時期がある。それは、2校目の中学校に勤務していた頃だった。その思いが膨らみ、3校目の中学校に勤務していた平成9年度から10年度に、福島県の国語教員が互いに勉強し合い、情報交換ができる場として、自ら会を組織しようと考えたことがあった。福島県の先生方のレベルアップを図り、福島の実践を全国に発信しようなどという大それたことを考えていた。

そうしたところ、タイミングよく当時国語教育界では著名であった瀬川榮志先生という方から「福島21世紀の国語教育を創る会」を立ち上げてくれないかという依頼が舞い込んだのである。何というタイミングのよさかと思った。その頃たまたま私の知り合いの先生方が、うまい具合に県内各地におり、それぞれすばらしい実践を重ね、活躍中だったこともあり、「よし、いけそうだ」と判断し、お話に乗ることにしたのだった。

ところがである。私自身が、イタリア、ローマに3年間行くことになってしまい、会の立ち上げの話はあえなく頓挫してしまった。言い出しっぺが国外逃亡しては話にならない。

帰国後、やはり勉強会は必要だと感じ、再び会を組織しよう動き始めた。しかし、今度は、教頭として南会津に単身赴任で行くことになった。激務と言われる教頭職をこなしながらの会の立ち上げは自分には無理だと判断し、再び頓挫した。

県教育センターに勤務するようになり、知り合いの先生方が増えていくにつれて、三度目のアクションを起こそうかと考えていたところ、新潟から福島大学に国語の先生がやってきた。その先生が中心となり、「福島国語の会」が発足するに至った。最初は「中学校部会」からスタートし、その後「小学校部会」と「高校部会」ができた。

3つの部会共に、毎月定例会を開催しており、昨年2月の時点で中学校部会が51回、小学校部会が35回、高校部会が24回を数えるまでになった。私は、以前県教育センターにいるときに出来立ての中学校部会に数回参加し、奥会津へと去っていった。その後再び県教育センターに戻り、また参加するようになった。中学校部会に2年ぶりに行ってみると、受付に2年前の私の名札があるではないか。感無量とまでは言わないが、ちょっとうれしかったことは事実である。

3つの部会が、これだけ継続できているのは、中心となる人物がいるからである。現在、中学校部会の事務局を務めているのが、県教育センターの指導主事である。精力的に会の運営に携わっている。彼がすばらしいのは、運営だけではなく、ご自身が研究公開や研修会に参加してきた報告をまとめ、我々参加者に配布してくれる点である。おかげで、私は東京に行かなくても、貴重かつ最新の情報を得ることができている。

小学校部会の事務局を務めているのは、以前、私が授業の達人として紹介した方である。そして、高校部会を担当しているのが、福島大学特任教授の方である。どちらもすごい方である。

福島国語の会の特徴の一つに、多くの学生が参加しているという点がある。毎回、参加者の半数以上が学生である。さすがに、現場の先生方で、平日の19時からの会に参加できる方は限られてくる。

県教育センターに復帰し、国語の会に毎月参加するようになり、学生さんとも話す機会が増えた。私の学生時代とは違って、皆さん優秀でよく気が利く。こういった方が教員になってくれれば、福島教育にも明るい光が見えてくると期待しているところである。

私にとっては、福島国語の会に参加することで、脳が活性化し、学生さんと話すことで、瑞々しい感性にも触れることができる。これからも、毎月楽しみにしながら会に参加したいと思う。そのためには、オンラインによる開催もあるが、まずはコロナ禍の収束を待つしかない。